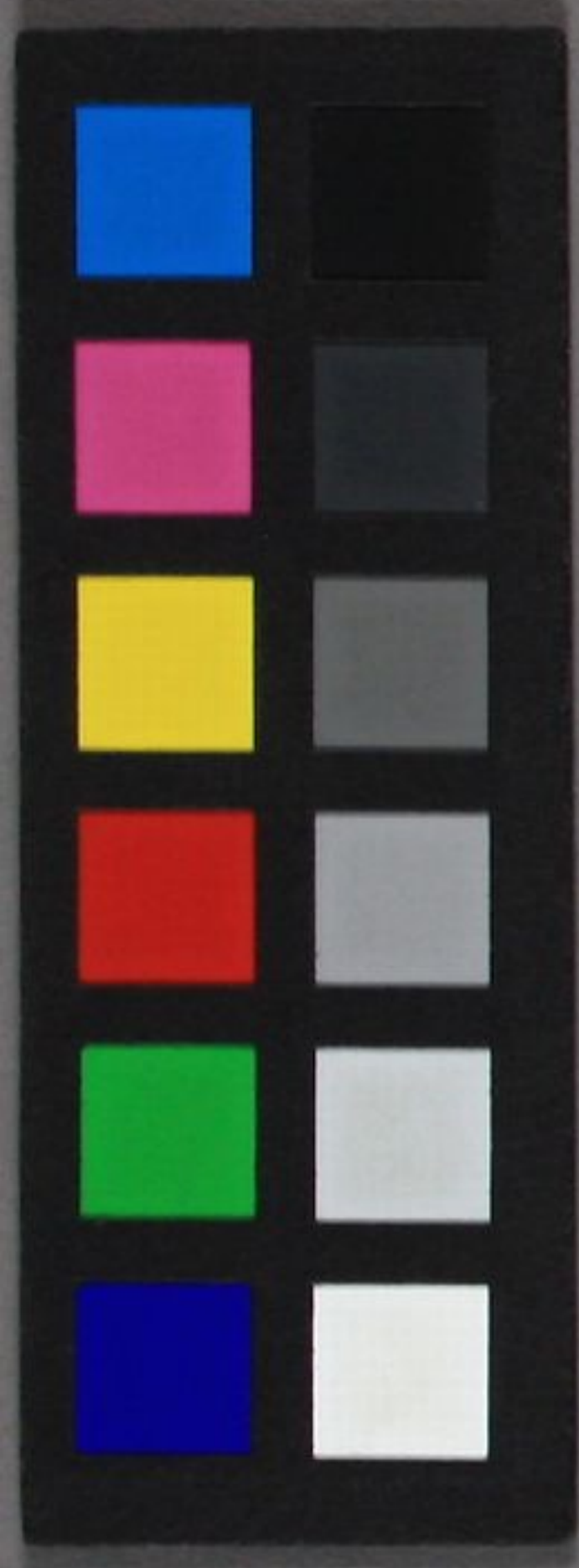


郁中竹

集詩

岸海牙象

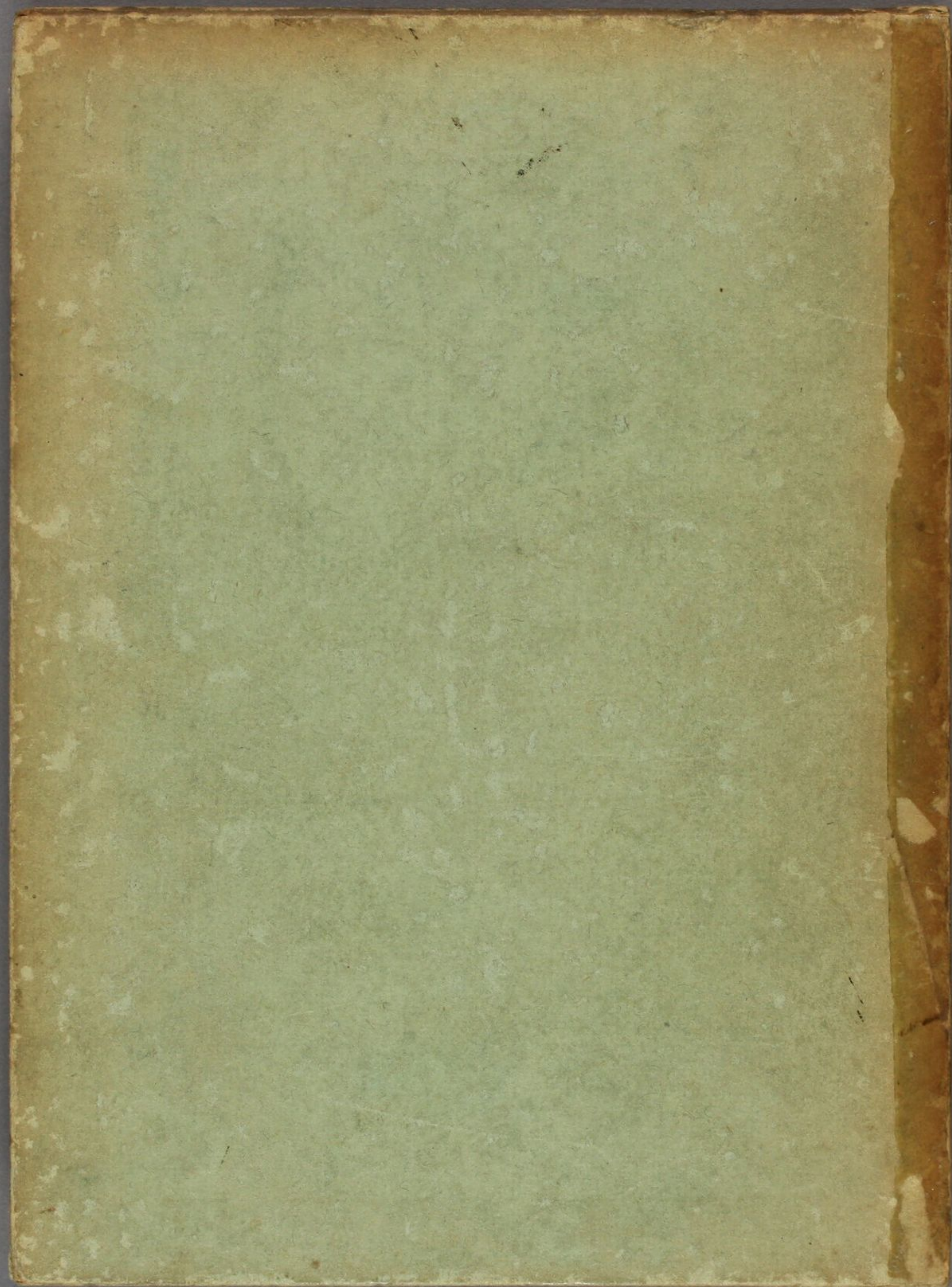
版房書一第



竹中郁詩集

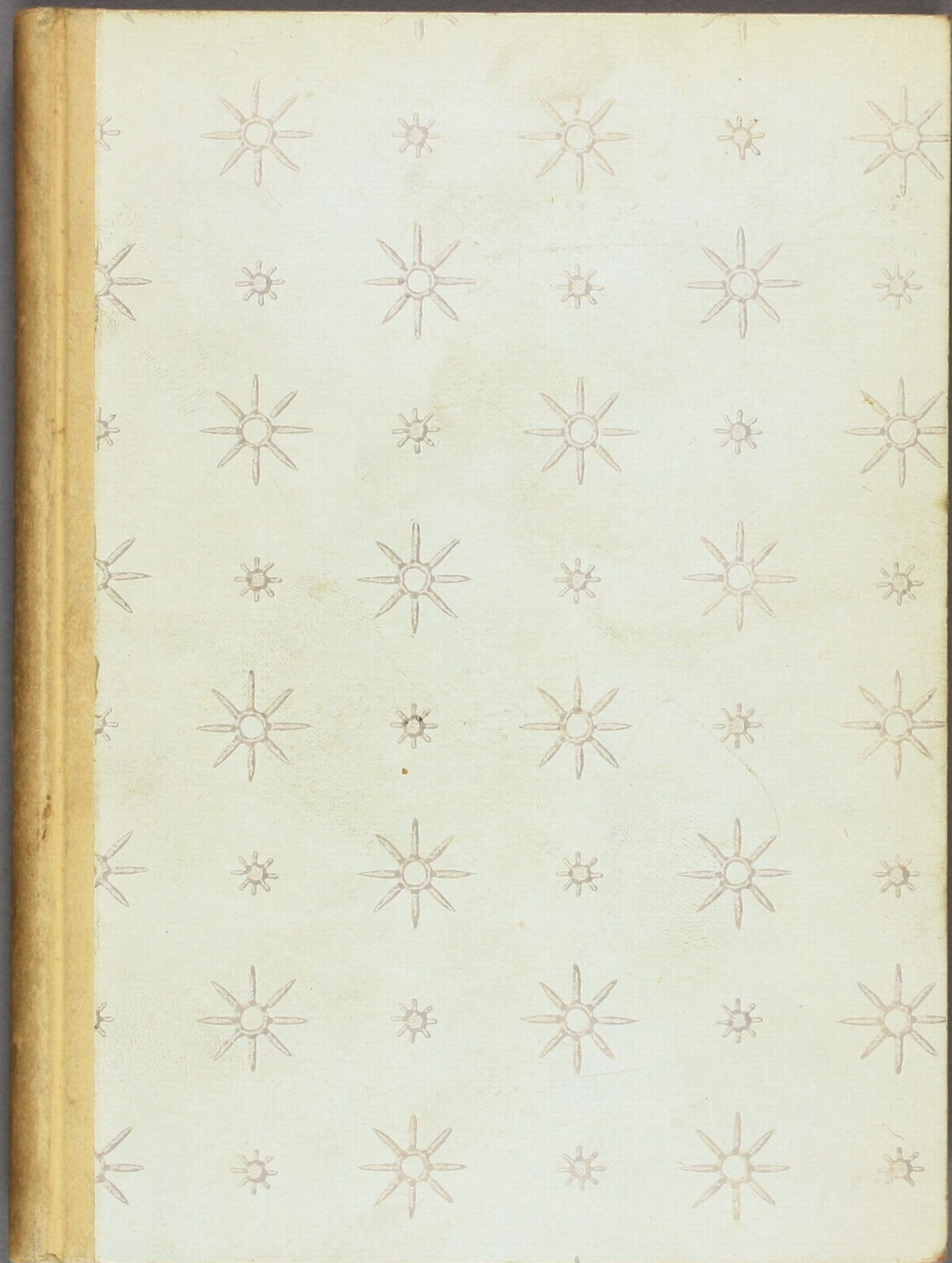
象牙海岸

第一書房刊

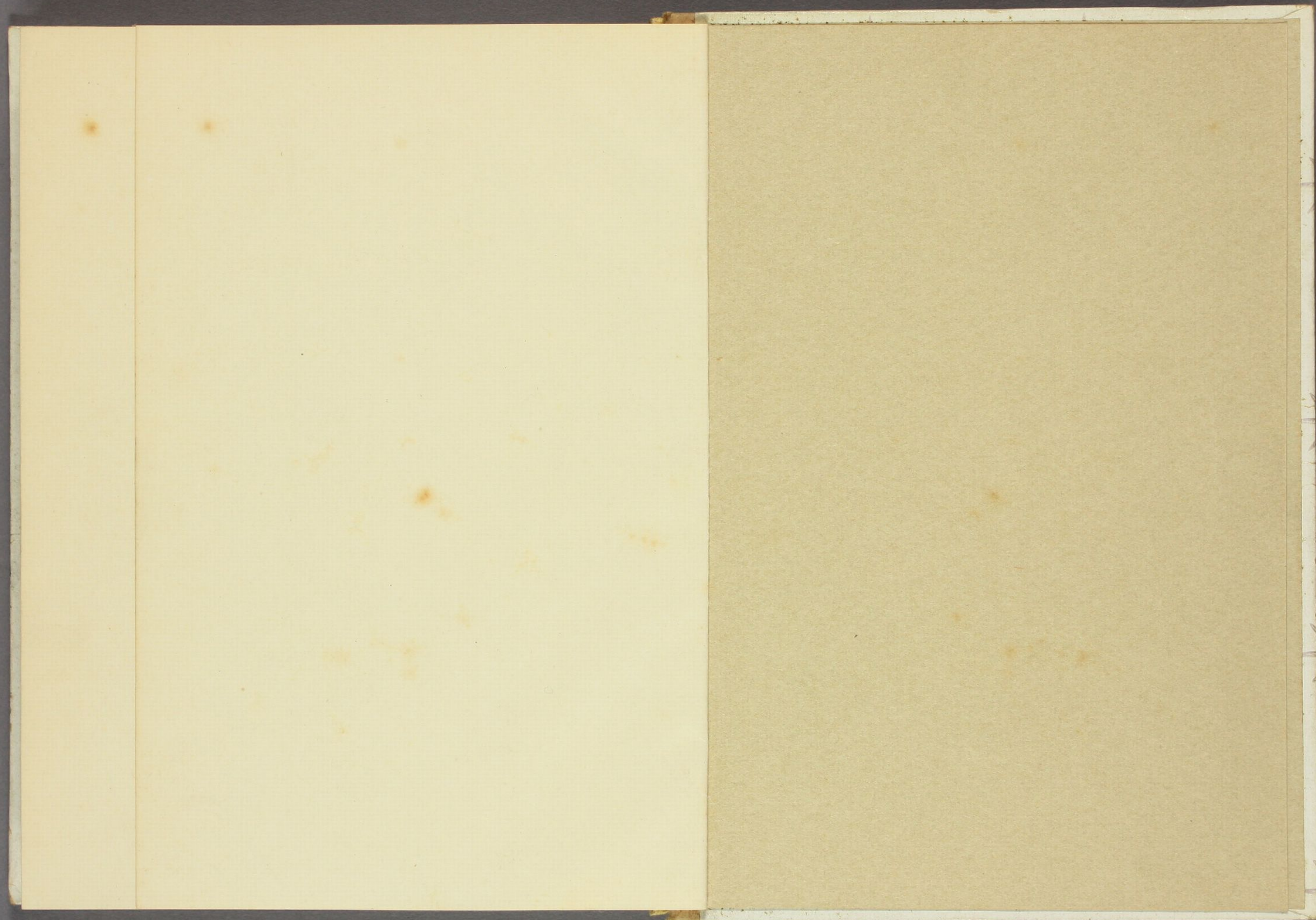


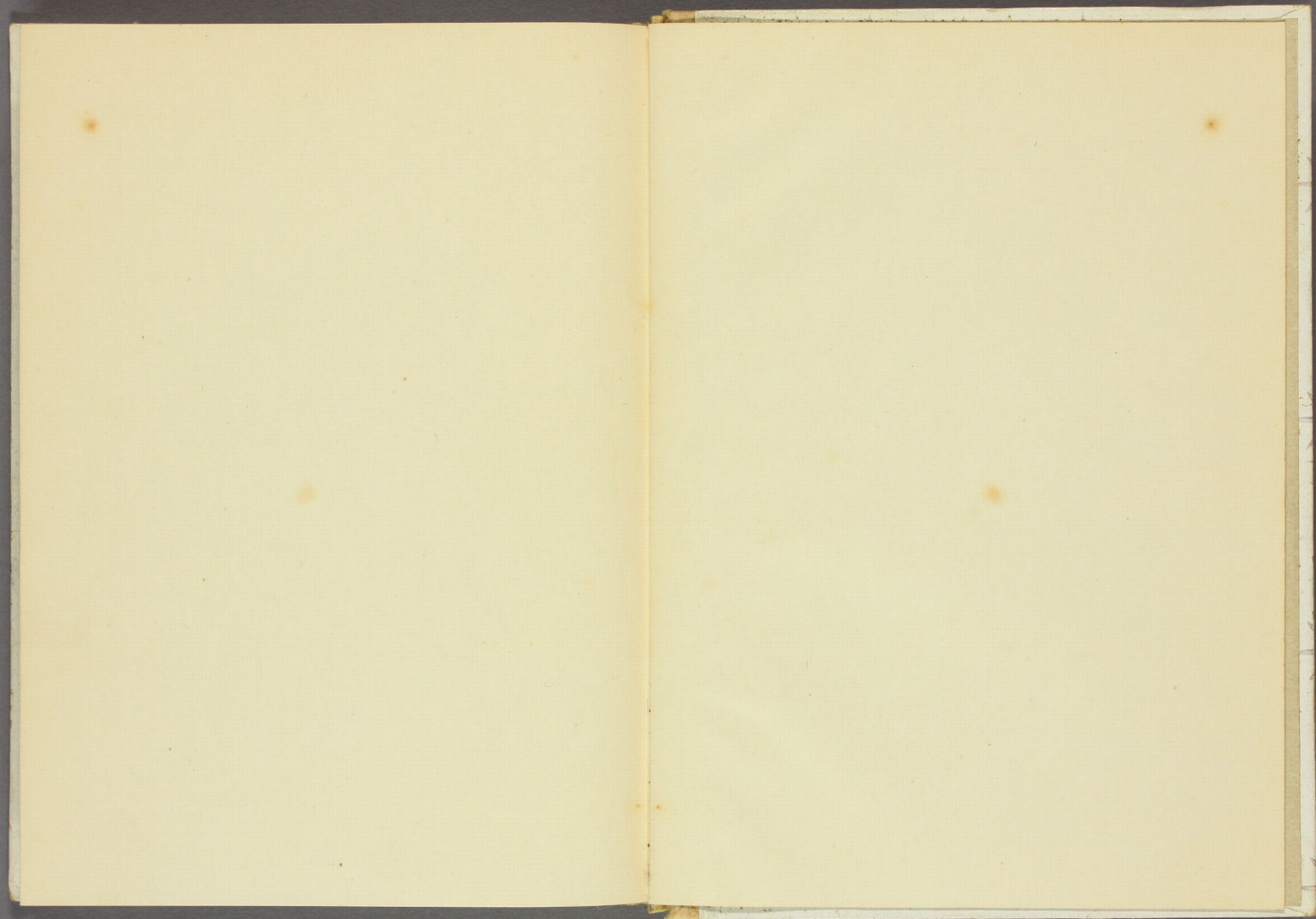


竹中郁詩集 象牙海岸









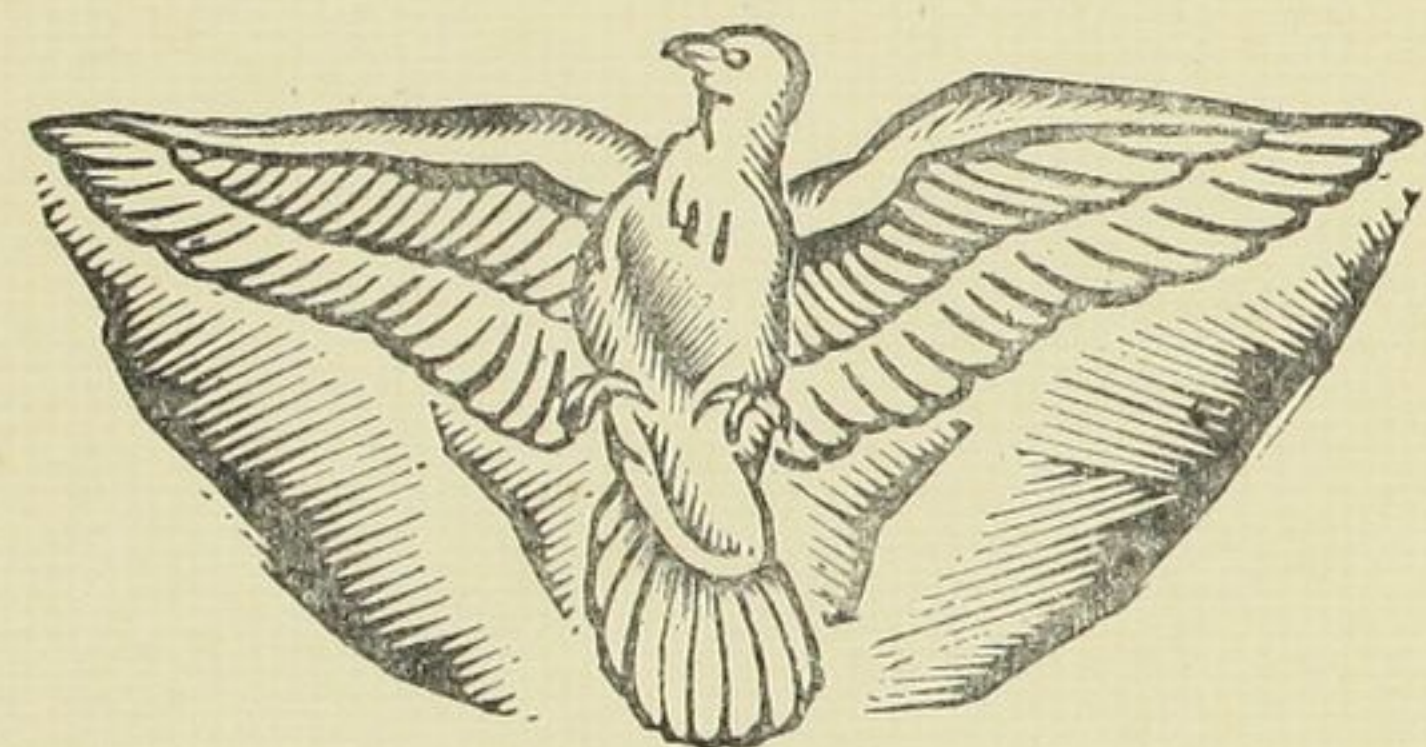
和紙別刷五十部刊行

著者本	五部
內 刊行者本	五部
發賣本	四十部

郁 中 竹

集 詩

岸 海 牙 象



京 東

房 書 一 第

父母におくる

はしがき

歐洲を旅行してゐた二年間、私は始終ぐうたらだつた。つひぞノオトなんかも持ち歩いたことがなかつた。ゆき當りばつたり、料理店の獻立表キヤルトとか、美術館の切符だとか、またはオペラの番組の切れはしなどに、何にするともなく書き残してきたものを、偶々日本にまで持ち歸

つて来てゐたので、暇にまかせて浄書してみると、色んな文字がまるで炙出あぶりだしのやうに出て来た。

形になつてみれば、今更捨て去るのも惜しい氣がしだして、青年の日の記念にまでもとこれを一冊に編みあげてみた。この「象牙海岸」一巻が、讀者の机上にまで私の若い旅行を繰りひろげ得れば幸である。

竹 中 郁

詩集 象牙海岸

象牙海岸 解説

亞弗利加西岸ニアリ、往昔ソノ海岸ニテソノ名ノゴトク象牙ヲ貿易シタリト云フ。他ニ黄金海岸、胡椒海岸、穀物海岸、奴隸海岸ナドアリ、同ジクソレラノモノヲ取引セシニ依ルナルベシ。

ラグビー Cinépoème

アルチユウル・オネガ作曲

1 寄せてくる波と泡とその美しい反射と。

2 帽子の海。

3 Kick off! 開始だ。靴の裏には鉾がある。

4 水と空気に溶解けてゆく球よ。楕円形よ。
石鹼の悲しみよ。

5 (あつ どこへ行きやがつた)

6 脚。ストツキングに包まれた脚が工場を夢みてゐる。

7 仰ぎみる煙突が揃つて石炭を焚いてゐる。雄大な朝をかまへてゐる。

8 俯向いてゐる青年。考へてゐる青年。額に汗を浮かべてゐる青年。叫んでゐる青年。青年。青年はあらゆる情熱の雨の中にゐる。喜ぶ青年。日の當つてゐる青年。

9 美しい青年の齒。

10 心臓が動力する。心臓の午後三時。心臓は工場につらなつてゐる。飛んでゐるピストン。

11 昇る壓力計。

12 疲勞する労働者。

鼻孔運動。

13 タツクル。横から大きな手だ。五本の指の間から、苔のやうな人間風景。

14 人間を人間にまで呼び戻すのは旗なのです。旗の振幅。(忘れてゐた世界が再び眼前に現れる。)三角なりの旗。悪の旗。

15 工場の気笛。白い蒸気。白い蒸気の噴出、花となる。

16 見えぬ脚に踏みつけられて、起きつづける草の感情。中に起きられない草。風、日に遠い風のふく地面。

17 ドリブル六秒。ころがる球。雨となるベルトの廻轉。

18 汗をふいて溜息する青年。歪んでゐる青年。(球は海が見たいのです。)

19 伸び上る青年。松の尖つた枝々。

20 密集！ 機械の胎内。 がつちりと喰ひ合つてゆく歯車。

21 ぐつたりとする青年。 機械の中へ食はれてゆく青年。 深い深い睡眠に落ちこむやうに。

22 何を蹴つてゐるのだらう。

胸から下ばかりの青年。
(ああ僕は自分の首を蹴つてゐる。)

23 Try!

24 旗、旗旗旗。

25 わつと放たれた労働者の流れが、工場の中から市中さして。 夕闇のやうに黒い服で。

26 飛んでゆく新聞紙、 空気に海月と浮いて……。

27 踏切がしまる。 近東行急行列車が通りすぎる。 全く夜。

28 落ちてゐる首。(どこかで見た青年だ。)

29 太鼓の擦り打ち、鈍く、鈍く。

30 雨だ、雨だ。

百貨店 Cinépoème

à M. Man Ray

1 開いては閉まる昇降機だ。人ひとり居ない。

2 床の上に落ちてゐる花だ、花瓣のない花だ。

3 階段を駆けのぼつてゆく靴靴靴。女の靴。

4 中に踵のとれた靴。

5 鏡の面で身をくねらせてゐる寶石の首飾り
をつまんで見給へ。美しい寶石は美しい蛇
類に似た執拗さをもつてゐる。
(そこの鋭い光線が井戸を覗くやうに深い。)

6 軽快な計算器が舌をだす。舌をだす、舌を
だす。

7 白い舌。

8 美爪術した細い女の手だ。

20

9 一グルテンの銀貨を掻き集める手、女の手。

21

10 計算器が停まる。その数字の最大限に達し
たからだ。

11 自動車の後尾の排気孔から出る瓦斯の斷續。
白い瓦斯だ。

12 大きな赤ん坊。

13 獨逸文字で「この子の父親をさがしてゐます」

14 裝飾窓にうつる絶叫せる群衆。

15 母親は硝子の中で備はれて、生きてゐる人形を勤めてゐる。

16 裸體の母親。

17 特に美しい足から股。

18 白い夜會のネクタイが飛ぶ。蝶蝶をまねて飛ぶ。

19 ただ廻轉する、廻轉する廻轉ドアア。空虚な白晝の廻轉。

20 (その中に囚はれて動けぬ男の影が見えま
すか。)

21 驟雨と廻轉ドアア。咫尺をわかたぬ急激な
廻轉數と雨の線とだ。

22 二十三秒。

23

流れに浮びあがる花。

24

間もなく揉まれる花。

25

手の下に手。手の下に手。手の下に手。
りなく出てくる手。手。手。限

26

計算器の内部の美しい囁きを見よ。
機械と死んでゐる花。

27

階段を駆け下りる鼠だ、鼠だ。

25

28

振りかへる鼠。

29

押し摧かれた花、形のない花が、折れたマ
ツチ、焼けた紙、硝子の破片、煙草の吸殻
などと一緒に落ちてゐる。

30

開いては閉まる昇降機だ。人ひとり居ない。

24

ハムマー Cinépoème

A

1 走る線路。光る線路。ナイフのやうに交叉する、交叉する線路。つづく枕木の並行線。

2 つぎつぎと別れてゆく線路、線路。

3 つひに海だ。

4 海にうかぶ一艘の汽船。巨大な壁。拒絶。
(行く手は壁なんだ)

5 乾舷標を洗はうとする波、匍匐する波。

B

1 女の髪が風に騒いでゐる。顔のない髪。

2 白い帆のはためき。

3 高い檣のてつぺんでペンキ塗りの水夫が働いてゐる。

28

4 俯瞰する海。迫る海。

29

5 あつ、顛落、落下する水夫。

6 碎けちる航海ラムプ。

C

1 ハムマー、ハムマーを握る手は鋏を打つ、
眼に見えぬ速さで。

2 休む手、しかし開かうとはしない手。

1 血管、脈うつ血管。

4 海へ落ちこむ鎖の群。

5 波と波とに吞まれて、
泡泡、泡。

6 微に消えてゆく波紋。

競馬 Cinépoème

A

1 千法紙幣を數へる細い指にダイヤモンドが
光る。

2 面帕をかかげて微笑む女。

3 女の裾を吹いて、風は落葉と捨てられた馬
券とを追つかける。人の心のやうに。

4 馬券を賣り出す手の働き。(cinq fois numéro 7)
購ふ足の慌しい速さ。

5 絶えず奔騰するコートの瀧。

6 けたたましく鐘がなる。

B

I 馬見所の柵に見えかくれする昂奮、かがやく馬の眼。ときに痙攣する腹の筋肉。

2 竝ぶ馬。脚。首。騎手。

3 稍、どよめく一等観客臺。

4 出發の針金線は揚つた。

5 蹴られた土。

6 消えてゆく馬の姿。

7 雪崩れる群衆、上氣した蜂谷。騒ぐ木の枝。

C

1 両眼鏡の中を疾走する馬、森、芝生、そして、鞭の風。(numero 7 は落伍だ)

2 後へずつてゆく地面。ああ暗くなる。

3 バタンと閉まる扉。握りしめられる馬券。

4 空しく消される掲示板の白い「7」

5 階段を重たく下りる足。傍を速く駆け下りてゆく足。

6 再び馬券賣場に殺到する無数の足。足。

7 遠く、どこかでほくそ笑む紳士。

恐慌 Cinépoème

1 高圧線の太い影が、長い煉瓦塀のうへに揺れる。

2 重々しく閉ざされる鐵柵の門。

3 動く門の中には起伏する工場がある。

4 汚れた空気を破つて……

5 廻る紡錘をみつける。紡錘をまもる繊細い手が添つてゆく。

6 紡錘は太る。

7 一本の葉巻煙草。

8 重役の一つ鈕をかけ忘れたズボンの腹。

9 瘠せて鋭い女工は考へる。

10 女工ぢよこうの考かんがへは一羽はの鷺わしになつて羽搏はばく。や
がてどこかへ向むかつて舞まひあがる。

11 風かぜに騒さわぐ美うつくしい麥むぎの列れつ。つづいて飛とび立たつ
鳥とりの群むれ。どこかへ。

12 メガホンを左ひだりに、右腕みぎうではしつかと機き械がいを停と
める。

13 機き械がいの静せい止し。

14 叫さけびをあげる汽笛ホイッスル。

15 と、急きふに、倉庫くらの影かげから流ながれ出でる勞働者らうどうしやの
一いっ群ぐん。

16 ひとりでに轉ころがり始はじめめたトロツコ。トロツ
コ。

17 開ひらく門もん。

18 勢いきほひよく噴出ふんしゅつする排水孔はいすゐかうの水みづが、どおつと塵ちり

埃を押し流した。

19 捲きあがる砂塵、落ちては消えてゆく木の葉。

20 上氣した株式取引所の後場の二時半。

21 賣り、賣り、賣り、賣り、賣りの手の波。

22 無暗に發火する機關銃。

23 黑板の數字は矢繼早に慘落する。

24 ぐたりと死んでゆく空のケース。

25 恐慌！

26 雪崩れでる扉口を、明るい太陽の光線がつしと食ひとめてゐるやうだ。しかし、太陽も防ぎきれない。散つてゆく人。躓き倒れる人。

27 やがて最後に、がらんと
渦まく紙片、風に追はれて。
の立合所の中を

★

28 歌をうたふ口が歩いてゐる。ときどき口を
見えなくする旗がある。

29 旗の風。

30 そよぐ木。

31 空と雲とを映して流れる川のせせらぎ。

32 廣野のなか、新しい町につづく道がある
てゆく少女の肩に。

33 やさしく置かれる一つの手。

白鳥のやうに

スワン
白鳥のやうに

僕は知つてゐる。

誰が僕をこの冷たい肉體のなかに閉ぢこめたかを、僕はよく知つてゐる。

僕はたつた一度だけ、それに就いて打ちあけよう。

但し、今ではない、死ぬ時にだ。

僕が死ぬ時は、僕のながい囚はれの生活が終つて、新しく花花しい僕の生活が始まる時だ。

僕はそこではじめて發言の自由を獲得する。

自由になる時。

それまでは待つてゐて呉れたまへ。

詩の行方

詩よ。おまへはおまへを僕の中へ閉ぢ込めた
なり、何處かへ去つてしまつた。僕が苦しまね
ばならぬのはそのためだ。僕の血管にはおまへ
が脈を搏つてゐる。僕はありありとおまへを眞
近に感じ乍ら、しかも其處におまへは居ない。

時どき、僕は耐へ切れなくなると、自分で自
分の皮膚を引き裂いて、おまへを開放しようと
する。

そしてその度ごとに、おまへはだんだん僕の
軀の表面を隠すやうに染めてゆく。悪く濁つた
インクの雲で。

僕は害はれた。(僕に残つてゐる半生。)

やがてその中に、僕は僕でなくなつてしまふ
のであらう。ペン軸を手にしたまま。

言葉もなく……

私は白い帽子をかむつて海の中へ入つてゆく。

私に親しいのはこの冷たさと緊密さとだけだ。

私は海の底を匍つてゆく。

52

私を發見けるのは月だけだ。

53

私が私のもことになるのは、この月が廻轉し遂せてからだ。

私は待つ。小石のやうに。

一本のペンで

私は冷たい机に手をあてて思ふことがある。
幸福はここにあると。

私を欺くものの中にあつて、これだけは美しい雲である。嘗つておまへの眼の中にさへ、こんなにも私が愛したものはなかつた。

燃える石さへ、

翼のある花さへ、

あの黒い夜さへ。

私の手の下には、私を支へる世界がある。私の血液のなかを、しづかに天體が歩んで下りる。黙つた星が肉體のここかしこに輝いてゐる。

……終にあらゆるものを捕へることが出来はじめた時、私は捕へた。青い木蔭の梨の果を。白い鬘の馬を。眠る帆船を。夥しい隕石を。

そして、逃げてゆくおまへの肩をめぐがけて、それらのものを擲げつけた。

それから、私はよにも明るい笑ひ聲をたてた。

雲

ふと我に歸つた瞬間。
私は踏み外す、私の影を。

私の手、私の肩、
それから私の長い歴史。

もはや私はただの人間でしなくなる。
私には再び悲しみが一ぱいに満ちてくる。

雲が過ぎてゆく、地に影を落して。
あれは二度とこの私を包みはしないだらう。

飛行機が消えてゆく……
私のこれからの長い苦しみ。
雲はそんなことには頓着しないだらう。
(私はそれを知つてゐる)

失はれたもの

もはや私の書くものに眞實はない。
私から時間が離れていった。
私から女のひとが去つていった。
一枚の着物も引剥がれていった。
つひに私の絶望さへ。

私に信じられるものは、
最後に裸の私自身のみだ。
裸の私が歩いてゆく。
私に背ろを見せて歩いてゆく。
しかし、それさへやがて強烈な太陽のもとに見
えなくなつてしまつた。
吸取紙の中へ消えてゆく文字のやうに。

愛の一部

眠るのはいと容易く、いと軽やかに精神を傾
け得る。
私は頭脳を風に露はにした。

風はやさしく吹いた、
私の生を、
ついで私の嘘を。

言葉もなく、素直な手を光に透けて、
私は眠りに落ちる、ひとりの道をいとしづか
に。

位置

尋ねさがすものは、眼であり、翼であり、美しい距離であり……
私の腕に来てとまる小鳥は、咽喉が裂けるほど立派に鳴いた。

しかるに私の眼は開かぬ。
私はどちらを向いても歩けない、歩きだせない。
い。

私、
私はつひに腕を噛んで、小鳥のつつくがままにまかせた。
血が私を押し流した、はるかに。
そして、光が私を捉へはじめた。

一夜

ひどい暴風雨が噛み破つた。窓を。そこから光りがふくれて来た。部屋は景色と薬とで匂つた。帆船が現はれて、私の膝に止つた。私は眠つた。その甲板で。揺れた。私は顔を手で覆はねばならなかつた。恐怖は部屋の四隅にたむろする。

やがて……

私は健康を懐中して、朝に向つた。

樹の枝

編んだやうな樹の枝のあちらに、明るい空気が揺曳してゐる。

世界はあすこに在る。

私は手をのばしてあすこに届きたいのだ。

私は見つめる。樹の枝を引寄せたために。

私が光りを掴んだと同時に、私の精神は亂れた。

樹の枝が私の中で入り交つた。

家

空気のなかに美しく家は組み立てられる、
木の肌も白く。骨たかく。

頂きに、

空色の風に吹かれて、

鳥が一羽、眼を睜つて遠いどこかを眺めてゐる。

(地平線のあちらにあるものへ呼びかける)
—— おおい おおい

私は棲む。

私の若さのなかに。

私の肉體のなかに。

私の信じられぬもののなかに。

リュクサンブール公園

庭は美しい。

美しい庭園師の頭腦のやうだ。

——情熱をおもちですか。

——いいえ、お金銭さへも。

女が去つてしまふ。

噴水の音がはじめて聞こえる。

腰掛が冷えてきて、

僕は帽子の中にあつた。

僕は帽子の中にあつた。

ボクの反射

鏡の中へ私は這入つてゆけない。

私は断わられる。

鏡の中に私のカラア、私のネクタイ、私のカ
フス扣釦などが散らばつてゐる。

くづれ落ちた私を拾ひ集めようとして、手を
差し伸べる。

私の手をつかまへて、私でない私が、

「おまへとともに居たくはない。

おまへはその儘であるのがいいんだ。」

と命令するやうに叫ぶ。

私は崩折れる。白い灰のやうに。

光を前にして。

不幸

壁がそそりたつてゐる。不幸のやうに。

僕は起きる。

僕はすでに囚はれてゐる。家庭に。

僕は机にむかふ。苦しみを苦しむために。

ああ、しかし、僕が机に坐るまへに、誰かが

僕の場所へ坐つてしまつてゐる。

沙漠の中

私を包む種々な光線が、わたしを沙漠の中へ
隠した。私は沙漠の中で迷つた。私は恥かしい
のを辛抱して、短い尿水をした。逃亡するには
それが只一つの手段だつたから。

私は私の影をつくつた。

しかし、影は小さすぎたし、それにすぐ消え
てしまつたので、再び私は沙漠の中で迷つた。

眠り

しばらく地球から出てゆくために、僕は縞のピ
ジャマを着る。

（縞のピジャマを着た石が横たはつてゐます。

（希臘神殿の圓柱のかけらですね。

（こいつは愚にも人間を真似してゐるのですよ。
（水をかけてみませうか。

氣味わるく汗ばんだピジャマを脱いで、ああ又
僕に朝が来た。

絶望

僕は眠つてゐる。
誰かと一緒に、
一つの寢床で。

かしてくれるやさしい手枕。
僕はその手ばかりを愛撫する。

77

それ以外には
胴もない、
顔もない、
髪もない、

君はこの人を誰だと思ふ。
當ててみたまへ。

76

夢の結果

私の眠りの中で、夢が立ちあがる。歩きまはる。水たまりを越える。しばしば一本のステッキを立てて道を選んだりする。

雲が往來してゐる。

木がそよいでゐる。

夢はそこで立ち停つて消えてしまふ。

私がおこる。

ピアノの少女

少女はピアノを弾く。少女はピアノになる。

少女はなくなる。

少女の友達が訪ねてきて。

「あら、この部屋は離子さんの匂ひがぶんぶんしてゐるわ」と云ふ。

友達の少女はピアノの鍵に觸れてみる。

突然、ピアノのうへの花が生きてゐるやうに落ちてきて、友達の少女の裾のあたりを泣いたやうに濡らした。

名前

僕はひとりの女のひとを愛した。

その女を失つてから、その女の名前ばかりが僕の眼前に手紙のやうに堆い。

僕が新聞を読まなくなつてから何年になるだらう。

文字を書かなくなつてから何年になるだらう。

眼を閉ぢると、何十年かのちに、あの女が僕のもとへ歸つてくるのが見える。醜い姿になつて。

僕はそのころ、一匹の犬を飼つてゐる。犬に「スマ」と云ふ名前をつけてゐる。

海へ落ちこむ人

道は海へ落ちてゆく。

薔薇の垣根に沿つて、夕暮がある。

手帛で咳をうけてゐる人につづいて、手帛で咳をうけてゐる人の長い影がある。歩きたびに舞ひあがる埃の天使たちよ。

僕は胸を病んでゐる。療養所には女がある。

女の眼をみるのは可憐い。

道は海へ落ちてゆく。

こんな細長い時間があるくのはたまらないではないか。

海よ、近よつて呉れたまへ。

海よ。

ネクタイの道

ネクタイを結ぶ手をみるのは痛ましい。ネクタイを結ぶ手にかぶ青い脈の睡つてゐるすがた。おとなしい動物よ、おまへと一緒に鏡の中の青い道があるいてゆかう。

どこまで行けば行きつけるのか。
どこで行きどまりになつてしまふのか。
このネクタイの一本をたよりにして、僕は今日を歩いてみよう。

このネクタイよ。

ネクタイの道よ。

日常

僕は戦ひのために起きる。この一生をうちひしぐために、怨恨にみちみちた深呼吸を思ひ切りする。

門をあけると、一本の眞白な牛乳罐が女の胴體のやうに、朝日にかがやいてゐる。

僕は地面にぶつける。割れる。

これが僕の貴い日課だ。

僕はただ復讐をするために、僕はただ復讐をするために、この情熱を絶やさうとはしない。

無用の生涯に、ただこれ美しい復讐あるのみ。

智慧

考へは僕に眼かくしをする。僕は中途半端な不幸に陥ちる。頭の中で崖が近い。

戸をたたくのは誰ですか。

いやです、いやです。

この呼吸をとめてしまつて下さい。僕の呼吸をです。

はい、僕は壁の中にもいます。

赤い蛾

机の上で、ラムプの位置を近よせたり遠のけたりする。壁にうつつてゐる自分の影が伸びたりちぢんだりする。

影の中に、先刻から、赤い蛾が一匹動かうともしない。丁度僕の心臓を食ひやぶつてでもゐるかのやうだ。ラムプを消すと、僕の動悸のはばたくのがきこえる。暗闇にはつきりと、はげしく何ものかに負けてゐる音がきこえる。

傷

僕は急がねばならない。急がねばならない。
僕は朝の日光を戸のすきにみつけると、急いで眼をつむつてしまふのであつた。体力が日に日に衰へてゆくのを眺めてゐるのは快い。どんなにしても、地球が軽くなつて感じられるのは幸福なことに違ひなかつた。

僕は今では、地球と向ひあつて會話することさへ出来る。古い戀のことに就いて、ひとりの女のひとのことに就いて。
そして僕は楽しいことをみつけた。何時僕がなくなつてしまふかと云ふ、大きな楽しい期待をみつけた。

胸の蝶

I

楽器の絃の一本を指で弾いて鳴らした。

音が地球のあちら側から廻ってきた。
音が地球のあちら側から廻ってきた。

2

朝日をいつぱい胸にあてる。

肋と肋とのあひだに一羽の蝶が休んでゐるの

が見える。

二枚にたたまれて蝶ははばたかぬ。

蝶ははばたかぬ。

空虚の季節

I

寒い夜。

牡蠣が白い布のうへに揺らぐ、記憶のやうに。
しかし、この海は海ではない海だ。
たとへ冷たい小刀を手に置きかへてみても。
慄えやまぬ脈管。戀愛にみちて。

94

2

小刀にうつる灯かげ。遠くへ悲しみが流れて
ゐる。

95

そつとしておくものだ。

檸檬をしぼれ。感情をしめあげよ。

犬が舌を垂れた。濃緑色の一枚の葉。

3

空地の夕日。驢馬が空気の
中に沈んでゐる。
拾ひあぐべくもない。身はおちてゆく。
人みなは鳴く。

道が濡れて濡れて、この夜の深さは。
 太い樹のかげに女がゐる。地の氣を吸つて。
 扉のあく音がする。
 明りをざあつとこのあたりまで流す家がある

閱 歴

悲しみは遠い水脈になつてひろがる。投げす
 てて来たのは空罐だつた、ぼろ布だつた、破れ
 た靴の古物だつた。
 僕は兩眼鏡をあてがつて、そこだけが馬鹿に
 大きいのにどぎまぎする。

忘却はたのしい。忘却はたのしい。

旅行の指

紅^{レッド}海^{シイ}

午^ご前^{ぜん}六^じ時^じ。

紅^{レッド}海^{シイ}の太^{たい}陽^{やう}が昇^{のぼ}る。

私^{わたし}は顔^{かほ}も洗^{あら}はずに甲^{かん}板^{ばん}へ出^でてゆ^く。

タンクには紅海の水が一本のホースで導かれてゐる。縁を越す水が、始終美しい噴泉を形づくる。

どこを探して、これほど美しい噴泉があるだらうか。

羅馬に？

ノオ。

巴里に？

ノオ。

私は大きな雲を映してゐるタンクに跳びこんで、平泳ぎをする、クロールをする、浮身をする。この時のこの生を満喫する喜びは又とない。タンクは私のものだ。

いや、タンクばかりぢやない。この紅海も私のものだ。

私は舷を追つかけてくる大きな鱈と、約半時間競泳をした。鱈は海の中で、私は甲板の上のタンクの中で。

ブリッジ
船橋で

「夕立ですよ」

船長が指さす方に、獰猛に黒い夕立雲が猫のやうにたむろしてゐた。

「あれへ這入るやうにしてみませう」

汽船は心もち方向を更へたやうだ。

見下ろすと、甲板で水夫たちが白く立ち働いてゐる。みるみる雲が近づいて来る。

「あんな黒いインクのやうな雲をくぐつたら、水夫たちの白い襯衣が心配ですわ」と私が愚にもつかぬ話をしはじめると、皆まで云ひも終らせずに船長は、

「なあに、石鹼を軀にぬたくつて、襯衣から何からすつかり洗濯するんですよ」と昂然と答へた。

沛然と夕立がやつてきた。

下の甲板では、船長の命令でもあつたかのやうに、水夫たちが泡まみれになつて、白い襯衣やらズボンやらを、せつせと足で踏んづけてゐた。

私は何とはなしに、そつと自分を憐んでみた。それからY字型に肩をすぼめた。

カイロの旅宿

高い窓にあがつて、掃除夫が窓硝子を拭いてゐる。夕暮れ。

彼の手は燃え残つたちぎれ雲をとつては、澤山のガラスを拭き拭きしてゐる。

翌る朝、あの窓へは「明けがた」が早く着くだらう。

千年

ポンペイの廢墟をさまよつてゐる間ぢゆう、
私は奇怪な幻想に囚はれ通したつた。そして私
は雛罌粟の影や、缺けた圓柱、瘡せ細つた穹隆
の罨などのあひだをくぐつて歩いた。

私は跣足で歩いてゐたので、始終自分の影を
ふみ外さない工夫ばかりをしてゐた。さうでな

いことには、私は五月蠅い案内人の説明ばかり
を聞いてゐなければならなかつたからだつた。
私はたつた一人で、まんまと千年の時間を旅
行してきた。

千年。

氣がつくと、私の首はヴェスヴィオの灰のま
じつた煙で、やはらかに捲かれてゐた。破れた
皮膚から流れた血が、私に皮鞋を履かせてゐ
た。そして、私は太陽と手をつないでゐた。

ナポリ 鮮明なナポリ

ナポリの町は餘り空氣がつまり過ぎてゐるの
で、私は私の周圍に空氣を感じない。旅行者は
蝶のやうに眠つてしまふ。鼻に空氣の栓をさし
たままだ。

私は奈破崙帽をかむつたファシストの憲兵に
「美味しいスパゲツチを食べさせる料理屋を御
存じでしたら」と尋ねて、とある一軒のそれら
しい家の店先に腰を下ろした。スパゲツチの細
い穴を通じて、やつと空氣が吸へだしたやうに
思へた。

ところが、私は矢庭に叫ばねばならなかつた。
「給仕、この蠅をどけて呉れ」

指さす皿の中には、一匹の蠅が虎のやうに死んでゐた。

私は何リラかを拂ふや否や、方向も決めずに歩きたした。町はづれへ來ると大きな工場に美しい瀧が休んでゐた。糸杉の群れの下には墓がある。磁石をとりだして見ると、

……道は羅馬へ。

マルクン島（和蘭）

町の磔石を木靴の音が驅けてゆく。やがて堤をこえて、海の方へ消えてしまつた。子供が縄とびをしてゐる。足に銜をくつつけて。

釣橋の側で。

（たつた、これだけ？）

闘牛 1

正闘牛士の帽子には黄金色の日光が休む。
すこしうるさい小さな蠅よ。牛の眼がこちら
を見てゐる。おまへの翅音が大きすぎる。牛が
こちらへ進んでくる。蠅よ。

闘牛 2

牛が死の形をして出てくる。なんと怒つた形
貌だ。足で砂を引つ搔く、怒りの感情で引つ搔
く。僕は両眼鏡をあてがって、砂に書かれた文
字を讀んだ。

太い爪跡で……

「最先にかかつてくるのは何奴だ！」

トレド

水の上と水のなかとのアルカンタラの橋。
タツホの川に石投げいれよ。橋が二つに割れ
ると、中から雲のやうな羊の列が鬚だらけの羊
飼に追はれて出てくる。羊はお寺參詣をする。
お土産ものには一組の献上蠟燭がよい。

殺される牛

1

棧敷に列んだ女たちの、ゆらめく扇が死の刻
を数へてゐるやうだ。ときどき思ひ出したやう
に忙しくばたつかせるのは、彼女たちの心臓が
眠りかけるのを呼び醒ますのであらうか。

牛の背中は赤い血のリボンで飾られた。

このリボンは風に動かない。誰もほどくことの出来ないリボンだ。リボンは死の手で結ばれたのだ。

馬德里の太陽は若い。黄金色の髪を風に吹かせてゐる。

闘牛場をのぞくために、とりわけ今日の牛が立派かどうかを見極めるために、彼は近づいてくる。演技が終つて観客が歸つてからも熱心な彼一人が取残されてゐる。血と蠅とで汚れた闘牛場の真ん中に、柱の影にとりまかれて。

馬德里の夜

キヤスタネットの冴えた音が、旅館の扉口まで伴いて来て消えた。四月といふのにもう暑い空気がよ。夜番がふりまはす角燈に燈石はほの白く、先刻忘れてきた手帛のやうだ。いまごろあすこの珈琲店で、きれいなマドリの娘に拾はれてゐてお呉れ。星が散らばつてしまつて、好きな模様とは似てもゐない。

モンパルナスの雨

橡の葉に降りそそぐ雨のピアノシモ。傘が、顔が、肩が、腰が、地下電鐵の出口から浮き上つてくる。

次に出るのは何であらう。
ああ また女か。

日覆をつたふ雨の滴に、
氣まぐれな、はや日
が光る。

「給仕、珈琲黒だ。」

珈琲のコップをのぞきこむと、顔がある、肩
がある、空がある。こんなちよつとした世界の
片隅にさへ、退屈に歪んだ僕をみつけるのはた
まらない。

熱いのを辛抱して一息に飲み下す。
けちな自分よ、尿水になつちまへ。

橡の葉がさわぐ、僕にかかはりのない音をた
てて、爽かに、いと爽かに。

スーチンの雉

或る日、私は美術商が軒をつらねてゐるボエ
ッシイ街を歩いてゐた。すると、とある一軒の
ガラス窓のなかに、一羽の雉が横たはつてゐる
のを見た。

屋根から落ちる午後の日射に、その雉の羽根
が風にそよぐ。艶々しい反射をあたりに散らし

乍ら、その雉は横たはつてゐる。しかも、「傷」
に苦しみ悶えて、ガラス窓の外の眼をひく。
私が近づいてゆくと、雉はかすかに首をもた
げて、

「見られたくはない」
と云つた。

その「雉」の箴めこまれた額縁には、鮮かに
黄金色の名札がうちつけてあつて、(Soutine)と
讀まれた。

セエヌ河岸 1

洋袴ズボンのポケットにリヤウテ両手をさしこんで
僕はまた何なにしにここへ來たのだらう、
たまに見つけた石ころを
日本にほんにゐた時のやうに蹴けつてみる、
石ころにもちやんと落着おちつくところがある。

126

この橡とちの葉はの影かげと
丁度ちやうど靠もたれかかるによい手てすりとがあるのは、
うす暗くらい下宿げしゆくの一日いちにちをいくら短みじかくして呉くれるか
知しれない。
新橋ボシマフを青あをい乗のり合ご自動車ユが越こしてゆく、
川蒸氣かはじやうきが烟突けむだしたふ倒たふしてくぐつてゆく、
エツフェル塔たふがくつきりと高たかい。
釣針つりばりを垂たれてゐる大公望たいこうぼうたち
あの人達ひとたちには小ちひさいけれど目的あてがある、
目的あてのない僕はここに來て
それでもほつと氣きが休やすまる。

127

ルウブル宮だ、

あすこにはモナ・リザの微笑がある。

もつと歩いてゆけば

サラ・ベルナルアル座では畫興行だ、

それに兩替橋には生々とした花市がある、

僕はやさしいあの娘の口唇をすぼめて笑つた顔

を想ひ出した。

ほんにポケットを探れば四法、

小さな鉢のベコニヤでも買つて

僕の下宿の味氣ない生活に

ぱつちりと灯を點さうよ。

セエヌ河岸 2

新橋や

兩替橋や

藝術橋が

おびただしい夕日の氾濫をさへぎつてゐる、

エツフェル塔の籠の中で

もはや夕日は赤銅のやうにたぎつてしまつた。

僕はさつきからその壯觀にうたれて

小半時間 この石の欄干に靠れたままだ、

誰も僕に氣づいてゆく人もない、

幸なことに僕はただ一人で考へてゐられる。

さらざらと呼吸もつかれぬ光線の中で

僕は幾萬年かの昔を生きた、

僕は幾萬年かの未來を生きた、

僕は底知れぬ廣大無邊の世界中を

一瞬のうちに歩きまはつた。

靠れてゐる石の欄干や、
流れてゆくキルクの栓や
朽ちかれた花の包みや、
そんな生命のないものばかりの中で
僕は劇しい生甲斐を感じた、
はふり落ちる两眼の涙で
夕日が僕の頬をつたうた。

下宿にまつてゐるものは
なじめない書物と白い寢床とだけだが、
僕は足どりはやく夕日と群衆との氾濫の中へ躍
りこんだ。

巴里の裏町

この谷のやうな家と家とのあひだへ
けふ一日が沈んでいつた。
もう敷石が見えなくなつてしまつた。

まだ部屋には灯がともらない、
卓の上で珈琲茶碗だけが寒く灰白い、
そこにだけ佗しい一日がのこつてゐるやうだ。

猫がないた、
誰かが咳をして下を通つた、
がたんと扉が音をたてた、
みんな僕にかかはりのないことばかりだ。
僕は考へる。
僕はどうして一人なのだらう……。

部屋に鍵をかふ音がする、

水を流す気配がする、

この僕の傍を通りぬける變なもの

時間のやうなもの 羽織のやうな 空気のやう

なもの 窒息させるやうなもの、

そして僕自身を壁の中へ没却するもの……。

もう卓の上の珈琲茶碗も見えない。

僕は 僕は「ああ」と云ふ聲さへ

咽喉の奥へのみこんでしまはねばならぬ

匂ひのある暗の空気と一緒に……

壁の中の世界はくらい。

電車の悲鳴が遠い。

スエズ以東

☆

スエズからカイロに至る百數十哩の砂漠の中
の道は、陽炎の中に起つて陽炎の中に没して
る。

それにしても、われわれが自動車で二時間半
を疾走したと云ふことは、劃然と地球の表面に
一線を引いたことになる。

☆

僕は一再ならずボウバクたる砂のうねりの中に
蜃氣樓を發見した。

それがみな不思議に水のある景色ばかりなの
だ。

「僕は咽喉が渴いてゐた」と云ふと、讀者は
すぐに答へるだらう。

「錯覺だつたんだ」と。
然うだ。

142

しかし、讀者よ、錯覺でない蜃氣樓ばかりだ
とは誰が云へよう。

☆

停車場で、大ていの人^{ひと}は楽しいと思ふか、ま
たは悲しいと思ふかの二つである。

しかし、僕にはそのどちらでもない時^{とき}の方が
はるかに多い。

143

☆

手に持つてゐるのと着たのとは、一つの外
套たうに二つの重さおもがある。
これは甚はなはだ家庭かていに似にてゐる。

☆

ミユウズは意い地ぢわるく人ひとが寝ねしづまつてから
下おりてくる。詩人しじんに限かぎらず、諸君しよくんは紙かみと萬年筆まんねんひつ
とを寢床ねどの中なかへ用意よういして這入はいることだ。

☆

白い襯衣しんやうが乾かわいてゆく。正午しょうごができる。
鹽しおのかたまりになる。鳥とりが下おりてくる。

☆

雨が降つてゐるときだけ静だ。
やむと喧しい。

☆

數學は中學校でだけ厭なものだ。

☆

飛行船の影が、目測して飛行船自體の約十三
倍半の大きさで地球を刷く。
たちどころにその高度何米突かを測れ。

☆

飛行器發射機からとびでるまでは、飛行器發
射機に飛行器が含まれてゐる。

ほんの一センチメートルでも飛びだただけで、
ここにはじめて飛行器が獨立して考へられる。

☆

「ナポリを見てから死ね」
こんな言葉は繪葉書のやうに俗悪な極彩色だ。
僕は「コンゴ地方を見てから」と云ふ。

☆

子供は數字から大人になつてゆく。

☆

仰向いてゐる花。　　うつむいてゐる花。
を向いてゐる花。　　横

……さう人間が勝手に思ふのだ。
花々は思つたままに咲いてゐるのに。

☆

退屈の重さは、地球自體の重さなのだ。

☆

スエズ運河を大きな汽船が徐行してゐる。
そのなかの一等船客用ロオンチの壁に掛けて
ある一枚の世界地圖に見入りながら、背廣姿の
日本の陸軍少將が「エエト・スエズハドコダ」
とつぶやいてゐる。

かかる情景は貴くないことはない。

150

☆

Pang 夫人との甲板での會話。

「バン て、どんな字です」

「バン？ をかしいですよ。ナを二つ書いて

下にシと書いて、それから電話番号の番ね。わ

かりにくいでせう」

と云ひながら、その楚々とした指で彼女は掌

に「藩」とかいた。そして藩夫人は、「妾、神

戸で生れて、八つまで居りました」と云ひ添へ

るのを忘れなかつた。

151

☆

大きな象を引つぱつて、印度人が森の中をうろろしてゐる。野性を失つてしまつたこの象に、「地球のやうに大きいね」と云ふと、おとなしく「はい」と答へた。
もう、手に負へない象だ。

☆

藝術家は潔癖であるのはよい。
しかし、貞操帯は排斥すべきだ。

152

☆

この白哲な世界的庭球選手ラコスト氏を汚ごし得るのは、たつた一本のネットのみだ。

☆

第一のサアヴェイスの決まらないうちに、第二のサアヴェイスを打ちだせる力を稽古すること。

153

☆

跨線橋を越しながら、ほんの四十秒くらゐ、
いつもと違つた眼で自分の町を見下ろすと、そ
の度ごとに、見も知らぬ新しい路次のあるのを
みつける。

☆

五米突にあまる大きな鱈が僕の乗つてゐる汽

船を追つかけてくる。あの鱈は、僕が乗つてゐ
るのを知つてゐるのだらうか。

☆

汽船がシンガポールに着くと、石炭のやうに
美しい土人の子供が丸木舟に乗つてやつてくる。
丸木舟の上で櫂をもつて、ポールを高く打合
ひする。時には汽船の横腹へあてて、また返つ
てくるのを櫂で打つ。汽船の料理室の小さな圓

窓へ入つたかと思ふと、ボールにパン粉がくつ
ついで返つてくる。
僕は感心する。美望する。
あの子供たちの頭脳はその手を動かすことよ
り外には使はれることがないのだ。

☆

地球をとりまく帯の色。

☆

薔薇の花を剪つてゐると、子供がやつてきて
「赤いばらには赤い影
白いばらには白い影
ボクの下にはボクの影」と歌ひだした。
鉄を休めてうへを向くと、
「鉄に蟻が一匹ゐるよ」と注意してくれる。

☆

僕は獨逸から出版された「世界は美しい」と云ふ名の寫真帖をながめてゐた。
「世界は美しい」
事實、「世界は美しい」
この寫真帖には、不思議に人間がいらてない。

158

☆

ものに溺れることの出来ない人間の不幸は云はずもがなだが、その不幸にも溺れ切れない二重の不幸を、僕は僕の中に持つてゐる。

159

孤獨の紀念

☆

モンスウリ公園にて。

ベンチに腰かけてゐると、木の葉洩る日影が
僕をもてあそぶ。僕はいつのまにか、ベンチの
上に揺れる陽炎になつてしまつてゐる。洋服の
縞模様ある陽炎に。そして近くで遊んでゐる輪
まはしの女の兒に見惚れてゐる。

☆

日が暮れた。洋燈のぐるりに黄金色の霞がで
きる。

そこにだけ夜があるので、暗やみの中の僕は
地球の外にゐる。

164

☆

日曜日。パリ人はみな郊外へ出てしまふ。
しめたものだ。僕は晴着をきて、がらんとして
寂しい町を思ふ存分に歩ける。

☆

同じく日曜日。窓をひらくと隣りのピエエル
老人が挨拶する。「今日はいつもより田舎がち
かい」

165

☆

たびたび見る路次うちの一場景だが、……
戦争で兩足をなくしてしまつた父親が、暮れ
かねる午後六時の窓ぎはの明りで新聞をよんで
ゐる。彼は娘の歸つてくるまでは、どんなに暗
くても洋燈をつけようとしなない。
彼女が歸つてくると、狭い家中は洋燈が二重
についたやうに耀く。父親と娘とが晚餐をたべ
はじめる。

166

☆

巴里人の眞似をして、僕も海岸へ避暑にいつ
た。海の中に沈んだ赤い珊瑚をつまんでみると、
それが赤い海水服をきた女だつたりした。

167

☆

太陽が沈みそこねてゐる。エツフェル塔に着物のはしを引つけて。僕が溜息をついてゐるのは誰も知らない。一日は永い。太陽が沈みそこねてゐる。

☆

君達は理髪床でこんな経験をなさいませんか。

168

理髪床の親方が、磨ぎすました剃刀をふりまはしてゐるあひだ、鏡の中の自分の肖像には首がない。ふと見ると、わきの棚の上なんかにはやんと載つかつてゐたりする。そんな経験をなさいませんか。

☆

女は鏡がすきだ。始終、手提袋のなかにしのばせておく。やがて鏡が彼女たちに小つちやな反逆をはじめるとを知らぬのかしら。

169

☆

骰子の目が思ふがままに出だしたら、なんと
いふ不幸のはじまりだらう。その人は、もはや
賭博にさへ身を忘れ得ない。

☆

大洋にのぞむと僕は妊婦のやうに呼吸ぐるし
い。このとてつもない空気の層をまへにして、
あまりに僕の肺臓は小さすぎる。

170

☆

雨があがる。水たまりがのこる。子供は踏ま
ないやうに海峡を越えてゆく。

☆

草花舗の裝飾窓が花の吐息で曇つてゐる。
花にも思ふことがある。

171

☆

すばらしい驟雨があらゆる聲を呑んでいつた。死の世界もかうは静寂ではないであらう。僕の軀は、ほんの瞬間ではあつたがこの地球ではない喜びにうちをのいた。驟雨がやむのと一緒に、僕はとてつもない速力で地球の表面へ牽きもどされる。悲しい速力。悲しい速力。

172

☆

樹。
正午がまるい影をつくる。お婆あさんが動かなくなつてしまふ。眠つてしまつたからだ。影は眼をさませない用心をして、しづかに横にたちのく。

173

☆

子供こどものゐるところ、必ずかならず太陽たいやうが努力どりよくして光ひかりをそへてゐる。ぐるりでお天気てんきが十分じふぶんに燃もえてゐる。

☆

完成くわんせいせるモデル女をんな。

モデル臺だいに立たつて、あらゆる角度かくどの視線しせんの雨あめをあびたので、今いまでは彼女かのぢよの姿態ポオズに角かくどといふものがない。

174

☆

人ひとひとりゐない海岸かいがんを歩あるくのは、自分じぶん自身じしんが鳥からすになつてゐるときだ。吹ふきちぎれさうな翼つばさを両肩りょうかたに感かんじる。

☆

汽車きしやは地中海ちゆうかいに沿そつて走はしつてゐる。僕ぼくはこの風景ふうけいを描べう寫しやする。

175

美しいタイプライタアの文字で。
時速百二十キロで疾走するこの永遠の風景を、
壁の真中へ押ピンでとどめるやうに。
美しいタイプライタアの文字で。

☆

白いエナメルハニシの反射ハニシが美しい軀からだをふちどつて
ゐる。

石鹼せっけんの泡あはでまへをかくして詩人しじんが立つてゐる。
これがヴェニユスなのでせうか。

176

詩人しじんの美うつくしさは鏡かがみの中なかでだけでせう。
いいえ、鏡かがみをこはしてごらんさい。

☆

交尾かうびする牝馬めうまに名馬めいばの寫真しゃしんを見せたまへ。
交尾かうびする牝馬めうまに海岸かいがん蝙蝠傘ふつぷを見せたまへ。
交尾かうびする牝馬めうまにランニングランニングを見せたまへ。
交尾かうびする牝馬めうまに美しい花束はなばを見せたまへ。
交尾かうびする牝馬めうまに交尾かうびする牝馬めうまに。

177

☆

夕日の氾濫、おびただしい夕日の氾濫のなかに沈没しよう、一瞬のうちに何萬年以前を生き、何萬年未來を生きるのは、かかる時にたつた一人で、自分自身を氣體にまで燃焼させてしまふのにある。

178

☆

光る鐵砲に光る彈丸が列んでゐる。まるで日曜日から土曜日までのやうに。
引金をひく毎に、何萬年來の倦怠を深めるだけで、手には重たい鐵砲だけがのこる。まるで悔いのやうに。

179

☆

ヴァンセンヌの森。

ふたりの戀人同志が、自分たちの横になつた
形を芝生に美しく掘りこんでいつた。一枚の手
帛に縫とりがしてある。赤い文字で「わたしの
處女の誇り」

☆

リヨンにて。

橋上から投げられる麵麩屑を、鷗は自分の速
力を誇りに示すやうに、それを空中で捕へて
みせる。

180

だから、軽い麵麩屑のかはりに少し重い木片
をなげると、たちまち下の河原に嘴をぶつけて
一枚の手帛のやうに身をもだえた。

☆

日曜日の風と日光とは傾いた軒ふかく、柱に
かけた日曆をもてあそぶ。自轉車乗りが郊外め
がけて飛んでゆく。5が2を追ひぬく、影のや
うに重なつて……。

181

☆

日曜日にちえらびの「蚤マルシエオビエスの市」で、僕は六法フラスだして、こはれかかった額縁がくぶちつきの古風こふうな鏡かがみを買かつてかへつた。

薄日うすびのさしこむ下宿げしゆくの部屋へやで、有頂天うちやうてんになつて覗のぞきこむと、見慣みなれぬフランス人じんの中年ちゆうねんの男をとこがうつむき勝ちがに映うつつてゐる。「貴下あなたは何誰どなたです」と訊きくと、きまり悪わるげな顔かほをもたげながら、

182

「おおそれ、ジュウル・ルナアルつてんだよ」と答こたへた。

183

☆

その鏡かがみ、日向ひなたの方にむけると、「あつ、まぶしいつたら」と云いふ。

もくろく

五つの Cinépoèmes	九
ラグビー	一一
百貨店	一九
ハママー	二六
競馬	三二
恐慌	三八

白鳥のやうに	四六
白鳥のやうに	四八
詩の行方	五〇
言葉もなく	五二
一本のペンで	五四
雲	五六
失はれたもの	五八
愛の一部	六〇
位置	六二
一夜	六四

樹の枝	六五
家	六六
リュクサンブウル公園	六八
ボクの反射	七〇
不幸	七二
沙漠の中	七三
眠り	七四
絶望	七六
夢の結果	七八
ピアノの少女	七九
名前	八〇

海へ落ちこむ人	八二
ネクタイの道	八四
日常	八六
智慧	八八
赤い蛾	八九
傷	九〇
胸の蝶	九二
空虚の季節	九四
閱歴	九七

旅行の指	九九
紅海	一〇一
船橋で	一〇四
カイロの旅宿	一〇七
千年	一〇八
ナポリ 鮮明なナポリ	一一〇
マルクン島	一一三
闘牛 1	一一四
闘牛 2	一一五
トレド	一一六

詩集
象牙海岸
初版



昭和七年十一月廿五日印刷
昭和七年十二月一日發行

定價一圓



著者 竹中郁

刊行者 長谷川巳之吉

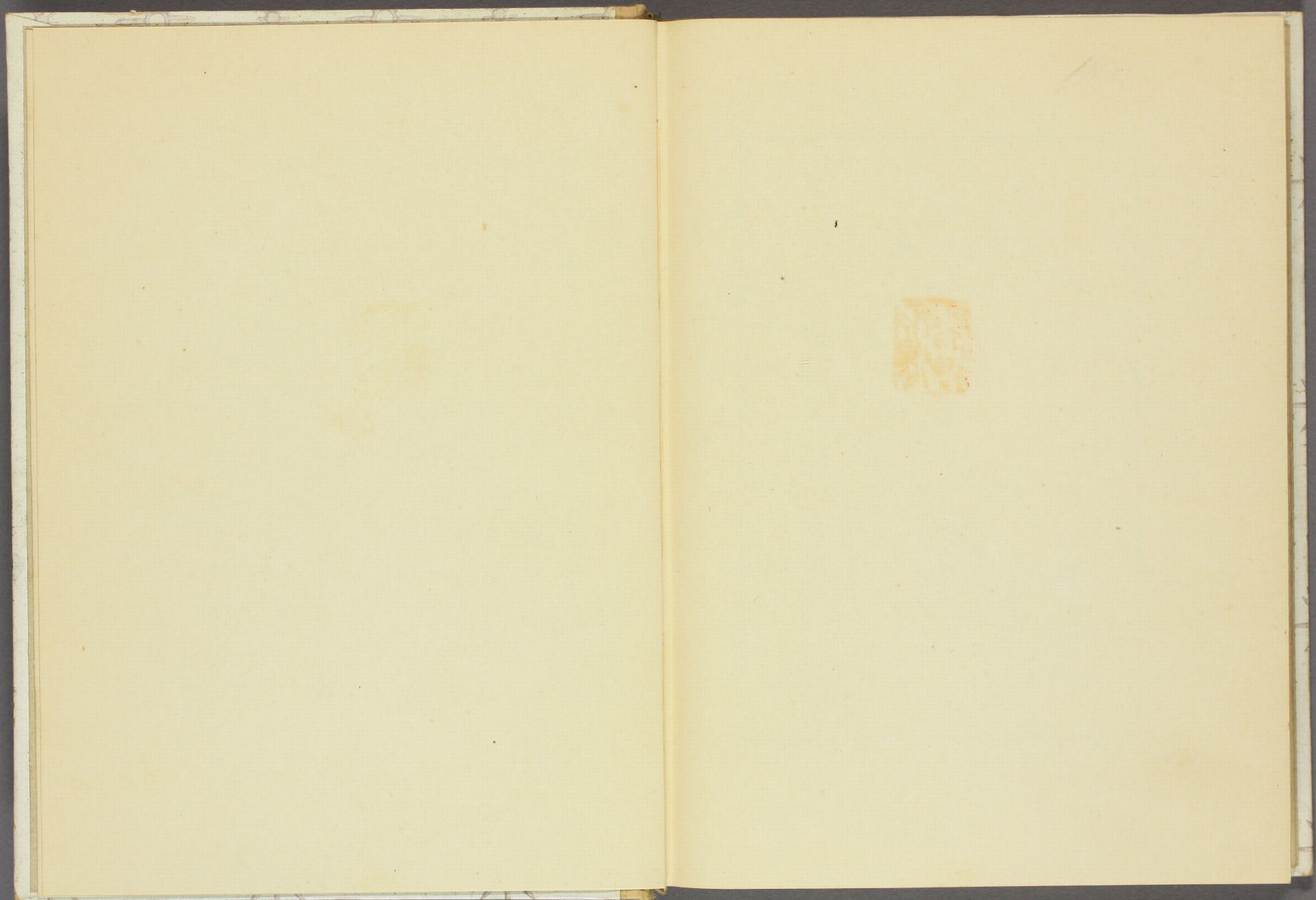
東京市麴町區一番町五

刊行所 第一書房

電話東京六四二二三
電話九段三三四四

印刷者 萩原芳雄
製本者 橋本久吉





12
1



